

5) ザクロ=石榴

ザクロはザクロ科の落葉小高木で、原産地は西南アジアのイラン、パキスタン、アフガニスタンなどである。インド北西部には種無し品種もあり、アメリカではフロリダ、ジョージア、ルイジアナなどでジュースの原料として栽培されている。枝はよく分枝するが刺があり、花は両性花と雌性の退化した雄花と 2 種類がある。学名は『*Punica granatum*』で、属名はカルタゴの意味で種小辞は「粒状の」である。ザクロの花弁は皺が多く花色は朱赤色、白色、赤色に白色の絞りなどで、八重咲のものもある。種子の外側には甘酸っぱい多汁の外種皮があり、生食用とするほか、清涼飲料の原料などにする。和名の由来は中国名の『安石榴』が略されたもので、ザクロの音は漢名の別名である若榴(ザクリュウ)が訛ったものである。

ザクロ栽培の歴史は古く有史以前から行なわれており、最も古い果樹の一つとされている。西南アジアから中国に伝わったのは 2 世紀ごろとされ、漢の張騫(チウケン)が西域に使いした帰りにもたらしたといわれている。日本には奈良時代か平安時代の前期には、すでに渡来していたと思われる。文献に初めて現れるのは 918 年の『本草和名』(ホンゾウワミョウ)である。しかし当時ツバキを『海石榴』と記していることから、この時期には『石榴』はすでに日本でも広く知れ渡っていたとも思われる (01-07-01 椿の項参照)。日本では実ザクロより花ザクロの方が主であるのに対して、中国では水晶石榴、大紅石榴など大果品種が多数ある。

『鬼子母神』は子授け、安産、育児の神様であり、『鬼神王』の妻である。1,000 人の子供を産んだと伝えられているのだが、この神様は他人の子供を食べてしまうため、仏様が鬼子母神が最も可愛がっていた末子を隠してしまう。以来、鬼子母神は悔い改めて安産の神になったという。この故事により特に日蓮宗の寺では深く信仰され、石榴の絵馬を奉納して祈願する。この話は遠く仏教説話にも通じるもので、人の子を取って食べていた『訶梨帝母』(カリテイボ)に対して、釈迦が石榴を与えて、人の子の代わりにその実を食べよと戒めたという故事が伝えられている。鬼子母神の話もこの説話に基づくものであろうが、日本に伝わると何故か石榴には「人肉の味がする」という尾ひれがついてしまった。鬼子母神が手に持つ『吉祥果』や『神紋』は石榴とされ、石榴を自邸には持ち込まないという地方も多い。また仏壇に供えるのを嫌うばかりか、石榴は病人の呻き声を聞きたがるとか、病人が耐えないとか、凶事があるとか、石榴の木が家よりも高くなると家が栄えなくなるとか、不吉の象徴とされてきた。しかし反対にこの木を植えておくと子宝に恵まれ、家は栄えるというところもある。また俗説ではあるが、ザクロの果実には女性ホルモンのエストロゲンが含まれており、生理不順や更年期障害などに効くとされてきた。しかし最近の研究ではエストロゲンは、まったく含まれていないことがわかった。

石榴の信仰は世界のあちこちに見られ、豊饒と多産のシンボルと考えられている。

これは石榴に種子の多いことと無関係ではなからう。トルコでは花嫁が石榴の果実を地面に投げつけ、こぼれた種子の数だけ子供に恵まれるという話があり、中国でも子孫繁栄の象徴とされ、結婚式の祝宴には欠かせない一つであった。ギリシャ・ローマでも長いこと豊饒のシンボルとされている。

一方ギリシャ神話では『ゼウス』と農耕の女神『デメテル』の娘『ペルセフォネ』(Persephone)が、冥土の王『ハデス』にかどわかされて、地下の世界へ連れ去られハデスの妻となった。デメテルはペルセフォネを連れ戻そうとするが、すでに石榴の実を食べさせられており、地上に戻るができない。そこでゼウスが仲裁に入って、1年の1/3は地下に暮らし、残り2/3は地上で暮らすようにしたといわれている。この物語はメソポタミアの『イシュタル』の神話にも似ているのだが、よく考えてみるとこれはほとんどの植物に共通している。つまり1年草であれば冬を種子で過ごし、球根植物にしても冬を地下で過ごすのは同様である。こうした自然界の法則と信仰が一つになったものは、世界のあちこちで普通に見られる。ジャガイモや多くの根茎植物を食用としている現実を見れば、いかにも大地が食料そのものを育てているように思える。つまり大地こそが豊饒のシンボルであり、このペルセフォネも豊饒の神として信仰されてきたのである。しかしキリスト教では、植物が種子として冬を越し、翌春再び芽を出して花を咲かせるという事実を『死と復活』の教義に結びつけている。古代人は死は必ずしも人間の最後ではなく、植物と同様に復活されるものと考えたのであろう。この考えはアイヌにも共通している。

石榴の根や樹皮には、**アルカロイド**の1種『ペレチエリン』(pelletierine)という物質を多く含有し、駆虫薬として用いられてきた。このアルカロイドは揮発性が強く、新鮮なものでないと効能は衰えてしまうが、漢方では果実の皮を『石榴皮』(セキリュウヒ)といて、止瀉、慢性的な細菌性の下痢、血便、脱肛、回虫、駆虫などに用いられた。特に根の皮は『石榴根皮』(セキリュウコンピ)といわれ、婦人病やサナダムシの駆虫剤とされている。また果皮は『石榴果皮』といい、口腔内の腫物や、歯痛止めにも用いられた。このため池の周辺に石榴の木を植えておくと、落葉や落果により魚が死ぬこともあり注意が必要である。

石榴は染料としての利用も古くから知られている。樹皮、葉、果皮などから抽出された液に、媒染剤を用いて染色すると媒染剤の種類に応じて、紫褐色、紺褐色、褐色、焦げ茶色、黄金色などが得られ、未熟な果皮と花からは赤色が得られる。また金属の鏡を用いていた時代には、銅鏡などを磨くための研磨剤としても利用され、その用途は広がった。材は固く木肌に多くの凹凸があるところから、床柱や飾り棚の装飾棚としても用いられている。

ザクロは乾燥気味の弱アルカリ性で、陽当たりの良いところを好む。花と実を見るだけであれば1才ザクロがいい。せいぜい40cm ぐらいの高さで花も実も楽しめる。



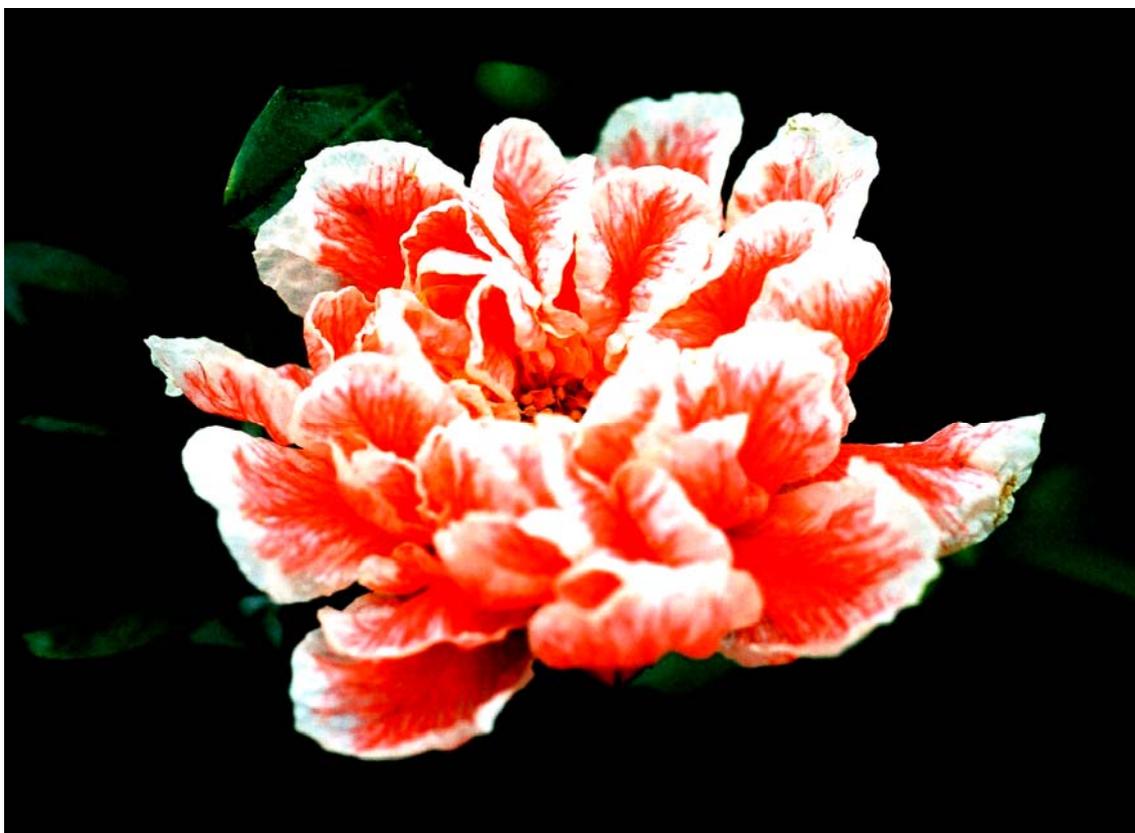
純白のザクロの花。ザクロには実がよく結実する実生りザクロと、花を楽しむための花ザクロとがあり、これはいわゆる花ザクロである（茨城県那珂市）。



ザクロの花、これも赤花の花ザクロである(さいたま市見沼区)。



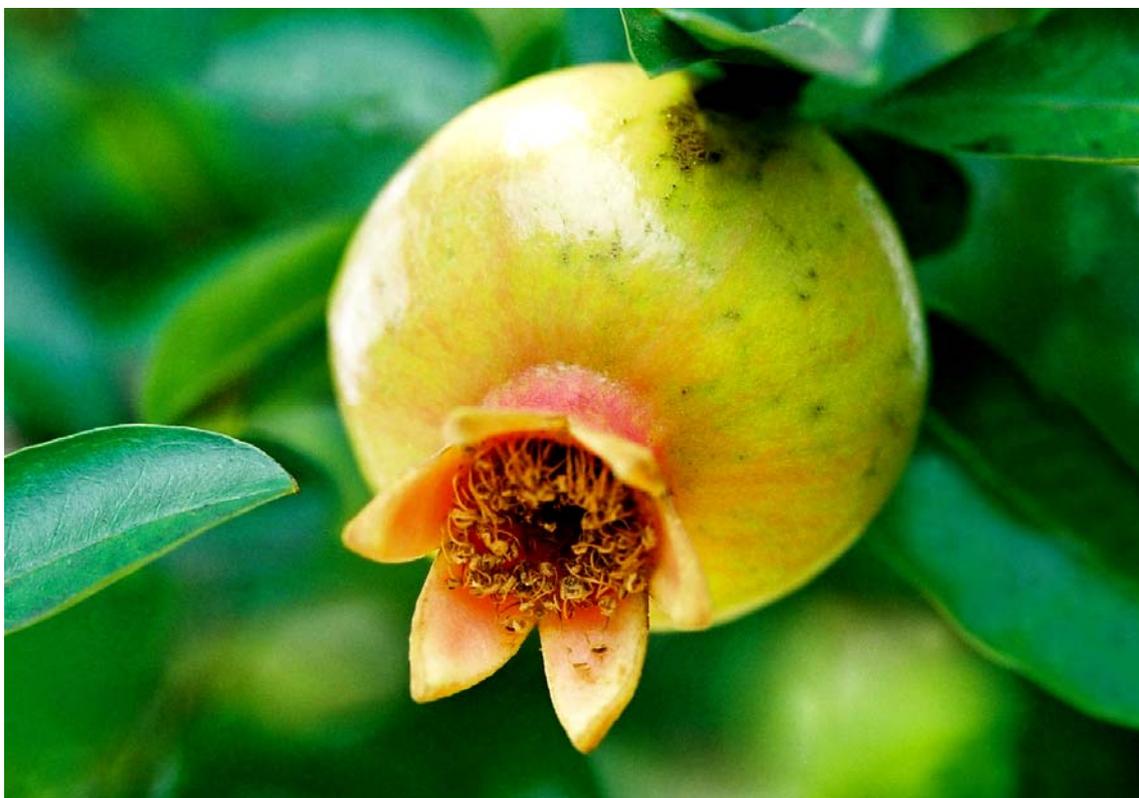
紅白に咲き分けたザクロの花。実生りザクロの花は、ほとんどの場合一重咲で、赤い花が咲く。したがってこの花も花ザクロである(茨城県那珂市)。



ザクロの花、美しい白覆輪の花ザクロである(茨城県那珂市)。



花ザクロの花、ザクロは種子の多いところから、子孫繁栄と豊穡のシンボルである。そういう観点からすると、花ザクロは豊かになった時代の副産物なのかもしれない(茨城県那珂市)。



ザクロの若い果実。9月ごろになると熟し始める(さいたま市緑区)。



完熟したザクロの果実、ちょうど食べごろである。ところがこの季節は台風がやって来ることがよくある。風で果実が落ちてしまう前に収穫しておくことが肝心である(埼玉県川越市)。



完熟したザクロの果実、こうなると食べるより眺めて楽しみたい(埼玉県川越市)。

[目次に戻る](#)